

盲導犬使用者の感じる盲導犬に関する問題点

石上智美／徳田克己

Issues concerning Guide Dogs for the Blind Perceived by Users of Guide Dogs

Tomomi Ishigami / Katsumi Tokuda

Abstract

This research was undertaken with the aim of shedding light on the following two issues and obtaining material to facilitate investigations into solutions to issues concerning guide dogs for the blind. (1) How do users of guide dogs grasp points of issue concerning guide dogs for the blind? (2) What is the relationship between the issues concerning guide dogs for the blind and the number of guide dogs used for the blind?

In this research, the following points were generally regarded as issues: (1) guide dogs for the blind are mistakenly viewed as “super dogs” ; (2) guide dogs for the blind are often handled by others without prior consent; (3) guide dogs for the blind are exposed to actions that are undertaken to catch their attention; and (4) medical and other costs impose a considerable financial burden on owners of guide dogs. At the same time, differences between individuals in terms of how they grasped the following issues were discerned: (5) guide dogs for the blind are often turned away and barred from entry; (6) actions taken to discipline guide dogs for the blind are often mistakenly construed as maltreatment; (7) owners must be considerate of their neighbors with respect to their guide dogs for the blind; (8) time and effort must be spent in taking care of guide dogs for the blind; and (9) guide dogs for the blind do not always perform their duties according to the wishes of their owners. Statistical analysis confirmed a tendency whereby persons using their first dogs were more likely to perceive (7) as an issue than persons using their second dogs.

Key Words: guide dogs for the blind, issues, number of guide dogs for the blind used

I. はじめに

1998年、「盲導犬に関する調査」委員会¹⁾によって、盲導犬の普及・発展に関わる問題を構造的に解明することを目的とした調査研究（以下、実態調査）がわが国で初めて行われた。当時、全国に838名いた盲導犬使用者（以下、使用者）のうち510名から回答が得られ、盲導犬使用の実態が明らかにされた。使用者の平均年齢は51.9歳であり、40～60歳代が全体の8割を占めていた。盲導犬を使用し始めた年齢については平均が43.2歳であり、「40歳代」が30.8%と最も多く、「50歳代」（23.7%）、「30歳代」（22.2%）が続いていた。盲導犬の平均使用頭数は1.6頭であり、「1頭目」（59.6%）が最も多く、次いで「2頭目」（25.9%）、「3頭目」（8.4%）であった。

使用者の年齢および盲導犬を使用し始めた年齢が中高年期であるのは、進行性眼疾患による中途失明者が中高年期において増加傾向にあること、また盲導犬は中途失明者にとって有効な歩行手段であることが主な理由である。実態調査において、盲導犬を希望した理由として「いつでも自由に歩けるから」、「1人で気兼ねなく歩けるから」、「白杖歩行（視覚障害者の単独歩行のひとつ）では不安・限界があるから」、「外出が安全・安心であるから」、「行動範囲を広げるため」などが挙げられている。また約9割の者が、これらの希望について「実現した」と回答している。このことから盲導犬は、中途失明者の歩行に関するニーズを満たしてくれる存在であると言える。

しかしながら、実態調査とともにいくつかの先行研究²⁾³⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾によって、盲導犬使用にはさまざまな問題点があることが確認されている。以下に、主な問題点の詳細を示す。

①盲導犬の受け入れ拒否問題

盲導犬使用に関する問題点として最も多く挙げられたのは「盲導犬の受け入れを拒否されること」であった¹⁾。また、清水・竹前²⁾および石上・徳田³⁾などの調査研究から、盲導犬の受け入れ拒否問題によって使用者の社会参加が妨げられていることが確認されている。2002年5月に成立した「身体障害者補助犬法」によって、公共交通機関、公共施設、公営住宅、不特定多数の者が使用する施設（ホテル・スーパー・レストランなど）では盲導犬の受け入れが義務となった。しかし、この法律が施行された2002年10月以降においても、受け入れ拒否の事例が使用者から報告されている。

②盲導犬の医療費等の問題

全体の約4割の使用者が「盲導犬の医療費等の経済的な負担が大きいこと」を問題点として挙げている¹⁾。盲導犬の医療費は、犬の体重や薬の種類によって若干異なるものの、獣医科での診察代や薬代などに年間3万～4万円かかると言われている⁴⁾。医療費のほかにも、犬のえさや飼育用品に費用がかかる。これまで、盲導犬の管理費はすべて自己負担とされてきたが、自治体や民間団体、獣医師会によって医療費の助成を行うケースがみられるようになってきた⁵⁾。しかし、このような助成事業はごく一部の地域でしか実施されていない。

③「盲導犬はスーパードッグである」という誤解

「盲導犬はスーパードッグ（何でもできる犬、失敗しない犬）ではない」ということは、

使用者が一般市民に対して適正に認識してもらいたいと思っている内容のひとつである³⁾。マスメディアにおける盲導犬情報に関する研究の結果から、その多くは盲導犬の賢さを強調し、あたかもスーパードッグであるかのように伝えていることが明らかにされた^{6) 7)}。このような偏った情報によって、一般市民が「盲導犬は視覚障害者が行きたいところまで連れていってくれる」、「盲導犬は絶対に失敗しない」などの誤った認識をもつ可能性がある。

使用者は頭の中に行き先までの地図を描いており、盲導犬が段差や角の手前で止まることを手がかりにしながら、盲導犬に「右に曲がれ」、「まっすぐ進め」などの指示を出して歩いている。石上・徳田⁸⁾が、小学生から成人までの一般市民約2400名に対して行った盲導犬に関する認識調査の結果から、全体の約5割の者は「盲導犬が視覚障害者を連れていってくれる」と誤って認識していることが確認された。使用者は一般市民に対して、盲導犬のことだけではなく自分たちの具体的な役割について知ってもらいたいと思っている。しかし、このような使用者のニーズは一般市民に知られていない。

また訓練を受けた盲導犬でも、最初の頃は歩きながら排泄をしたり、拾い食いをしたりすることがある。「盲導犬は絶対に失敗しない」という誤った認識は、盲導犬を使用する上で負担感や緊張感を使用者に感じさせている。

④盲導犬に関するマナーの不足

仕事中の盲導犬に対して「さわらない」、「気を引く行為をしない」、「食べ物を与えない」という3点は、使用者が周囲の人に守ってもらいたいと思っているマナーである。しかしながら、石上・徳田⁸⁾による調査の結果から、全体の約6割の者が盲導犬に関するマナーを知らないことが確認された。盲導犬は一般市民からこのような行為をされると、仕事に対する集中力がなくなり、使用者の事故につながる危険性が出てくる。

以上4つの問題点の他に、実態調査では「盲導犬のことで隣近所に気を遣わなければならない」、「盲導犬の世話に手間がかかる」、「盲導犬が思いどおりに仕事をしない」ことなどが問題点として挙げられた¹⁾。また「盲導犬をしつけている行為を虐待と誤解される」という問題もある⁶⁾。

使用者が盲導犬を有効に活用できる社会にするためには、これらの問題点をすべて解決しなければならない。その解決策を検討するためには、「使用者が上記の内容についてどの程度問題であると感じているか」という視点が必要である。また問題と感じる内容には、盲導犬の使用歴が関係していると思われる。盲導犬を使用し始めたばかりの頃は、盲導犬との歩行や犬の世話に不慣れであるため、日々何らかの問題に直面している状態である。盲導犬とともに経験を積むことによって、問題への対処法を身につけていくと思われるが、使用頭数との関係で別の問題がある。

1頭の盲導犬を使用できる期間は約10年間であるが、さまざまな理由（例えば、犬の怪我や病気、吠え癖が直らない、使用者が犬と信頼関係を作れないなどの理由がある）によって10年間に2頭目、3頭目の盲導犬を使用する場合がある。また犬の性格や体質は1頭ずつ異なっており、常に落ち着いている犬、人間が近づくとすぐに遊びたがる犬、神経質で臆病な犬など幅広い個性がある。これらのことから、盲導犬とともに同じ年数を過ごす使

用者でも、使用頭数によって問題のとらえ方が異なると思われる。そこで本研究では、使用年数ではなく使用頭数を要因とすることが妥当であると判断した。

本研究の目的は、次の2点を明らかにして、問題点の解決策を検討するための資料を得ることである。

- ①盲導犬使用に関する問題点についての使用者のとらえ方
- ②盲導犬使用に関する問題点と盲導犬の使用頭数との関連性

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

調査対象者は、「全日本盲導犬使用者の会」に所属している使用者287名の中から無作為に抽出した50名であった。以下に対象者の属性を示す。

- ①性別：男性23名、女性27名。
- ②年齢：平均57.1歳／30歳代3名、40歳代8名、50歳代13名、60歳代21名、70歳代5名。
- ③盲導犬を使用し始めた年齢：平均46.5歳／10歳代1名、20歳代4名、30歳代8名、40歳代14名、50歳代17名、60歳代5名、70歳代1名。
- ④盲導犬の使用頭数：平均1.7頭／1頭目23名、2頭目18名、3頭目8名、4頭目1名。

2. 調査手続き

調査対象者によって、読み書きの手段（点字・テープ・パソコンなどの電子機器・他者代読あるいは代筆）やそのスキルに差があることを考慮し、また選択した回答手段によって生じる調査結果の偏りを最小限におさえるために、すべての者に対して電話によるヒアリング調査を行った。調査時期は2003年7月～10月であった。

3. 調査項目

調査項目は、「調査対象者の属性」が4項目、「盲導犬使用に関する問題点」が12項目であった。盲導犬使用に関する問題点は、表1および表2に示した内容である。表1に示した6項目は、石上・徳田³⁾および下村・石上・徳田⁶⁾が行った調査において確認された「社会における盲導犬に関する誤った認識の内容」をもとに作成した。また表2の6項目は、「盲導犬に関する調査」委員会¹⁾による実態調査において、使用者から挙げられた「盲導犬を使用しての問題点」を参考にして作成した。

表1 社会における盲導犬に関する誤った認識

| | 平均値 | 標準偏差 |
|------------------------------|-----|------|
| 盲導犬をスーパードッグと誤解される | 4.1 | 1.1 |
| 無断で盲導犬をさわられる | 3.7 | 1.2 |
| 盲導犬の気を引く行為（口笛をふく、手をならす等）をされる | 3.3 | 1.3 |
| 盲導犬の受け入れを拒否される | 2.9 | 1.2 |
| 盲導犬をしつけている行為を虐待と誤解される | 2.1 | 1.3 |
| 無断で盲導犬に食べ物を与えられる | 1.8 | 1.0 |

(n=50)

表2 盲導犬との生活上の問題点

| | 平均値 | 標準偏差 |
|-------------------------------------|-----|------|
| 盲導犬の医療費などの経済的な負担が大きい | 3.2 | 1.6 |
| 盲導犬のことで隣近所に気を遣う | 2.5 | 1.5 |
| 盲導犬の世話に手間がかかる | 2.2 | 1.3 |
| 盲導犬訓練施設によるフォローアップを希望どおりに受けられない (注1) | 2.2 | 1.1 |
| 盲導犬が思いどおりに仕事をしない | 2.0 | 1.1 |
| 盲導犬との生活について、家族(同居者)の協力が得られない (注2) | 1.7 | 1.1 |

(n=50)

注1：フォローアップを受けたことがない5名を除いた。

注2：同居者がいない10名を除いた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 盲導犬使用に関する問題点のとりえ方

ここでは、盲導犬使用に関する問題点について尋ねた結果を示す。これらの項目の回答方法は5件法であり、数値が大きいほど、回答者はその内容を問題と感じていることになる。

(1) 社会における盲導犬に関する誤った認識

表1に、社会における盲導犬に関する誤った認識についての回答の平均値と標準偏差を示した。最も問題であると思われていたのは、「盲導犬をスーパードッグと誤解されること」であった。調査時には、「盲導犬が視覚障害者を連れていってくれる、盲導犬は絶対に失敗しないなどの誤った認識が問題である」という話が聞かれた。

「無断で盲導犬にさわられること」および「気を引く行為をされること」については、やや問題であると思われていた。しかし「食べ物を与えられること」については、そのような機会がほとんどないという者が多かった。

「盲導犬の受け入れを拒否されること」については、意見が大きく2つに分かれた。問題と感じていない者からは「以前に比べると、現在では受け入れを拒否されることが減った」、「受け入れを拒否されたら次の店を探す」、「いつも受け入れてくれるところにしか行かない」などの意見があった。一方、「身体障害者補助犬法が成立したにもかかわらず、依然として受け入れを拒否されることがある」という意見は、問題と感じている者から挙げられた。また、「外出する前に盲導犬を受け入れてもらえるかどうかを考えるため、盲導犬を使用する前のように気軽に外出できなくなった」という者がいた。

「盲導犬をしつけている行為を虐待と誤解されること」に関して、回答者の多くはそのような機会がないとのことだった。しかし、何回か誤解されたことがある者は「失敗したときには叱るが、日常生活では褒めていることの方が多い。一場面だけを見て虐待していると判断されることにストレスを感じる」と述べていた。

(2) 盲導犬との生活上の問題点

表2には、盲導犬との生活上の問題点に関する回答の平均値と標準偏差を示した。最も問

題であると思われていたのは「盲導犬の医療費などの経済的な負担が大きいこと」であった。回答者の中で、通常の予防接種や定期健康診断だけに医療費がかかる者、自治体や獣医師会などから補助を受けている者はあまり問題と感じていないようである。しかし、盲導犬が病気や怪我をして定期的に通院している者や、補助金をまったく受け取っていない者は医療費がかさむことを問題と感じていた。

その他の5つの内容については、全体的にあまり問題であると思われていなかった。しかし問題と感じている者からは、解決策が必要であると思われる意見が挙げられた。以下にそれらを示す。

- ①「盲導犬の世話に手間がかかること」について、「使用者本人が盲導犬に関する全ての世話をしなければならないことになっているが、自分がだんだん年をとってくると犬の身体を洗ってあげることが困難になる」という意見があった。確かに、盲導犬の健康管理やしつけなどの重要なことは使用者本人がやらなければならない。しかし、「様々なサービスを利用しながら（周囲の人の手を借りながら）自立した生活を送る」という障害者の自立生活のあり方を考えると、盲導犬の世話について、必要に応じて利用できるサービスが用意されてもよいのではないかと思われる。
- ②「盲導犬が思いどおりに仕事をしないこと」に関しては、「盲導犬はおとなしいと思っていたが、私の犬は吠え癖があって困る」、「屋外の歩行には何の問題もないが、屋内になると命令に従わなくなる」などの話が聞かれた。これらは、盲導犬の性格上の問題、あるいはその環境に適応できていないために起こっている問題、また使用者が盲導犬の扱い方に慣れていないことから起こる問題であると思われる。したがって、盲導犬訓練士による適切なフォローアップを受けることができれば、ほぼ解決できることであろう。一方、「1頭目の犬はとても優秀だったので1回行った場所をすぐに覚えてくれたが、2頭目の犬はこちらの命令がないと動いてくれない」という意見があった。これは、使用者の考え方に問題があるケースであると言える。盲導犬はあくまでも歩行の補助をするものであり、盲導犬に指示を出す使用者の方が歩行の主役である。一般の視覚障害者に対して盲導犬に関する具体的な情報の提供がなされていない¹⁾ことが、このような盲導犬に対する過度の期待につながっていると思われる。

2. 盲導犬使用に関する問題点と盲導犬の使用頭数との関連性

盲導犬使用に関する問題点と盲導犬の使用頭数との関連性を検討するために、盲導犬の使用頭数を「1頭目」（23名：平均使用年数5.4年）、「2頭目」（18名：平均使用年数12.8年）、「3頭目以上」（9名：平均使用年数19.6年）の3群に分けた。

盲導犬使用に関する問題点12項目のそれぞれについて、3群の回答の平均の差を一要因の分散分析によって検定した結果、「盲導犬のことで隣近所に気を遣わなければならない」という項目についてのみ、有意差が認められた（ $F(2,47)=3.30, p<.05$ ）。さらにLSD法を用いた多重比較によると、1頭目（平均値2.9, 標準偏差1.5）と2頭目（平均値1.8, 標準偏差1.3）との間に5%水準で有意差が確認された。しかし、1頭目と3頭目以上（平均値3.0, 標準偏差1.2）、2頭目と3頭目以上の間の差は有意ではなかった。

この結果から、1頭目を使用している者は2頭目を使用している者よりも、隣近所に気を遣わなければならないことを問題と感じている傾向があることが確認された。調査時には、「マンションに住んでおり、犬の毛が廊下に飛び散らないように玄関先を毎日掃き掃除している」、「家の中では盲導犬が吠えることがある。そのことについて隣の家から苦情を言われた」という話が聞かれた。

盲導犬との共同訓練（約4週間）の際には、歩行訓練と平行して犬との生活を送る上での基本（排泄のさせ方、食事の与え方、健康管理に関する知識など）を学ぶことになっている。しかし共同訓練を受けるだけでは、盲導犬との生活について詳細なイメージをもつことはできない。盲導犬を初めて使用する者に対しては、共同訓練の際に「実際の生活で起こり得るトラブルとその対処法」についての情報提供が必要である。

IV. まとめ

本研究において、全体的に問題であると思われていたのは①盲導犬をスーパードッグと誤解されること、②無断で盲導犬をさわられること、③盲導犬の気を引く行為をされること、④盲導犬の医療費などの経済的な負担が大きいこと、という内容であった。①・②・③の問題点を解決するためには、盲導犬の役割だけではなく使用者の役割について、また盲導犬に関するマナーについて、一般市民に対する啓発が必要である。④の解決策としては、使用者の経済状態や盲導犬の病気・怪我の状態に応じて医療費の補助金を出すための制度をつくることが考えられる。

⑤盲導犬の受け入れを拒否されること、⑥盲導犬をしつけている行為を虐待と誤解されること、⑦盲導犬のことで隣近所に気を遣わなければならないこと、⑧盲導犬の世話に手間がかかること、⑨盲導犬が思いどおりに仕事をしないことに関しては、問題のとらえ方に個人差がみられた。このうち⑦については、統計処理の結果、1頭目を使用している者の方が2頭目を使用している者よりも問題と感じている傾向があることが確認された。これらの内容に関しては、使用者一人ひとりに詳しい状況を尋ねることによって、解決策を検討していかなければならない。

引用文献

- 1) 「盲導犬に関する調査」委員会（1999）『「盲導犬に関する調査」結果報告書』日本財団
- 2) 清水和行・竹前栄治（2000）「盲導犬使用者の人権侵害に関するアンケート調査の結果についての報告」
盲導犬情報 24：2-7
- 3) 石上智美・徳田克己（2003）「盲導犬に関して一般市民は何を認識する必要があるか－盲導犬使用者に対するヒアリング調査の結果より－」実践人間学 6：33-37
- 4) 清水和行（1995）「盲導犬使用者の現状」視覚障害 136：20-26
- 5) 菊島和子（1999）「盲導犬は今」視覚障害 163：1-20
- 6) 下村祥子・石上智美・徳田克己（2001）「盲導犬使用者のマスコミ報道に対するニーズ」実践人間学 5：37-41
- 7) 石上智美・下村祥子・徳田克己（2002）「盲導犬に関する新聞記事および書籍の分析」障害理解研究 5：47-52
- 8) 石上智美・徳田克己（2003）「盲導犬に関する認識の変化－1992年および2001年における小学生から成人までを対象とした調査結果の比較を通して－」心身障害学研究 27：103-112